

30P1-am122

関東大震災における星一の救難活動

○三澤 美和¹(¹星薬大・薬理)

1924（大正13）年9月1日付の警視總監功労賞が星一記念室の壁に掲げられている。関東大震災時における星一の活動・尽力・貢献に対して授与されたものである。大震災により各所より上った大火災は2日2夜にわたり、帝都の3分の2は焦土と化し、死傷者20万人、焼失家屋40万戸に達した。京橋にあった星製薬株式会社の7階建て本社ビルは鉄筋コンクリート建てであったため、地震そのものによる被害はほとんどなかったが、類焼により内部は全焼した。大崎にあった星製薬工場は軽微な損害のみで薬品等に何らの損害も被らなかった。星一は震災発生早々に活発に動いた。本社機能を早々に工場内に移し、自ら陣頭に立って指揮した。社員、従業員を全員工場に集めて救護班を組織。星製薬商業学校寄宿舎を開放して罹災者2百余名を収容した。3台の自動車を駆使した救護隊は被災現場に向かう時には星製薬給水施設の氷と飲料水を満載して出かけた。「水」「氷」という旗を翻した自動車が二重橋外の数十万人の避難している広場へ近づくと、人々が殺到した。東京市内においては医薬品を供給できる唯一の会社となっていた。東京市内や郡部では感染が拡がり始め、警視庁衛生部は必死に防疫に努めていた。星は30余種の医薬品や医療材料、それに防疫上必要な消毒剤などを一般市民や警視庁、東京市役所、内務省、外務省、農商務省、各新聞社、銀行、病院などに多量寄贈した。会社としてもベント社製の当時最大のトラックを使用して救護品を配布した。星一は工場当事者を督励鞭撻し3日後にはくすりの製造を開始した。こうしたくすりの発送には、近隣各港において輸送船を借り入れる一方、貨車の貸切りを依頼して全国各地へ輸送した。関東大震災に際して星が精力的にわが身を削って行った一連の社会貢献が、一枚の功労賞の形で残っている。